

過労死ゼロ読書感想文⑥

「過労死110番―働かせ方を問い続けて30年」（岩波書店、森岡孝二、大阪過労死問題連絡会、以下同書）を読んで

冒頭に、発刊の目的等が書かれています。

「『過労死』は日本で生まれ、現代用語として社会的に認知され始めた一九八〇年後半から三〇年以上を経過するなか、この事象は今もなお、現代日本社会の負の側面を大きく映し出す社会問題」（同書P2より）と、過労死のことを紹介しています。残念なことに、世界中のどこでも見られる社会問題ではないということです。

その過労死に対し、「一九八八年四月に大阪で初めて実施された、弁護士による過労死に関する無料相談『過労死110番』は、過労死した当事者やその遺族の救済に向けた大きな取組」（同書P2より）となって、その後、「二〇一八年四月一三日に大阪過労死問題連絡会が行った『過労死110番 二〇周年シンポジウム』」（同書P2より）が行われた。

その内容を一部加筆したものが、このブックレットです。

これらの活動を通じて、「二〇一四年六月に過労死等防止対策推進法（過労死防止法）が、衆参両院の全会一致で可決」（同書P3より）と大きな前進がある一方、「脳・心臓疾患に関する労災請求件数はここ数年、（中略）増加する一途をたどっています」（同書P3より）

これらの現状を踏まえて、過労死撲滅の真の取り組みを考える出発点となるこのブックレットの目的は、「過労死問題を（中略）なくすことが、被災労働者（略称『被災者』）・その家族のためだけでなく、日本社会全体をよくするための共通の課題として理

解」（同書P3より）される社会を作るためです。

このブックレットの印象に残った点は、自宅で息子さんが自死した中間さんの言葉です。「子供を失うということは親にとってもう人生を失うことです（中略）嘘つきで自分の欲にだけ走っているような人間が生きていて、懸命に頑張る人間が死んでしまうことが許されない」（同書P58より）と忸怩（じくじ）とした気持ちで一杯です。

また、過労死を無駄にせずに、これから考えるNHKの織田さんの言葉にも耳を傾けたいです。「過労死の運動にたどりつけない方も実際にはとても多い。（中略）多くの方が孤独のうちに悩み苦しんでいます。そうした方々のことを思い、どう運動を広げていくのかも重い課題」（同書P58より）

「重い課題」ですが、日本の過労死問題が解決に向かう日々を思い、前向きに考えたいと思います。